

1. クリント・イーストウッド『陪審員2番』(2024)

待望のと言っていいイーストウッドの新作。映画監督としてのイーストウッドの魅力は、この人は本当に映画のことを知り尽くしていると思わせるプロットの配置とストーリーの展開、そして予期せぬ結末の設定ではないかと思うのです。この作品も隙のない凝縮した114分の法廷ドラマが展開され、そこには真実と正義を問うイーストウッドの姿勢が反映されています。

このところの作品で、多少なりとも不満を覚え、その再起を願っていた筆者にとっては喜ばしい作品となりました。ジョナサン・エイブラムスの脚本の緻密さもさることながら、イーストウッドの映画づくりと演出は、作品の流れの中での緩急の付け方、間の取り方には独自のリズム感があり、見る側を翻弄してしまう魔力的なものがあります。アメリカ映画に危機感を覚える筆者にとっては、アメリカ映画の底力と映画へ愛着の強さを感じられずにはられません。まあ、イーストウッドの特徴の一つである生真面目さが、今回はプラスに働いたと言えます。

法廷映画のジャンルは、なんと言っても『十二人の怒れる男』（1957 シドニー・ルメット）を始め、これまで数多くの名作と駄作が生まれてきました。陪審員制度は映画作品になりやすいドラマ性があり、そこで繰り広げられる論争はアメリカという国家の姿を反映します。この面白さはサスペンス性であり、人間性を含めた事件背後の暴露に作品の真価を問う重要なポイントがあります。フランス映画で昨年公開された『落下の解剖学』（2023 ジュスティヌ・トリエ）はそう言った意味での成功例でしょう。

また、この作品は全米で50館未満の劇場でしか公開されずMAX（WBの定額制ビデオ・オン・デマンド・ストーリーミングサービス）での公開、日本では劇場公開されなかったことで劇場公開のための署名運動まで起こったという現象があり、これからの新作公開のあり方を問うものにもなっています。

イーストウッドについて書いたついでに、『人生の特等席』（2012）について一言。永年イーストウッド作品のプロデュースを担当していたロバート・ロレンツ（1965~ ）の初監督作品でイーストウッドが主演。原題は「トラブル・ウイズ・カーブ」と言い（この邦題は最悪の部類に属します）この「カーブ」はピッチャーの投げる球種のカーブのことで、『マネーボール』（ベネット・ミラー 2011年）に匹敵またはそれ以上の野球映画です。

2. 内田吐夢『どたんば』（1957）（製作：東映東京/ 配給：東映）

このシリアスはドラマに所謂スター俳優は登場しません。多分に演劇的要素を具えた群像劇として捉えられます。炭鉱で起きた多分に人的原因の濃い事故で、五人の鉱夫が坑内の狭く空気の薄いスペースに取り残されてしまいます。救助へと向かいますが、さまざまな人間関係、感情の絡れのために救援は進みません。人命を救助しなければならないものの最悪捜索打ち切りもあり得る状況の中で、人間はどう行動していくのか、これは内田吐夢が展開した一つの日本人論でもあります。ここに登場するのは、貧しい生活を送る人たちであり、炭鉱と言っても大資本によるものではなく、個人レベルの炭鉱主であり安全対策も十分ではありません。炭鉱ということで、朝鮮人労働者の根深い問題も描かれます。さまざまな難問が噴出する中で、この群像劇を内田吐夢は強い統率力を駆使しリアリティあふれるタッチとトーンで作品を作り上げます。

原作は菊島隆三。脚本が内田吐夢と橋本忍。元々菊島良三が脚本まで手掛けたNHKのTVドラマであり、1956年に全編生放送で放映されたという経緯のある作品です。菊島隆三、橋本忍と言えば、一時期黒澤組の集団シナリオ作成チームのメンバーとして名作を世に送った人たちです。

出演者は、加藤嘉、志村喬、岡田英次、東野英治郎、中村雅子、山本麟一、江原真二郎、波島進。（撮）藤井静（美）森幹男（録）広上庄三（照）吉田一一（音）小杉太一郎

監督の内田吐夢 (1898~1970) は、1920年代から活動し、戦時中は満州映画協会に在籍し、終戦時には理事長甘粕正彦の自殺現場に立ち会った経験を持つという人物。戦前には『土』（1939）、戦後1954年に復員し東映に在籍し、『血槍富士』（1955）『飢餓海峡』（1965）『人生劇場 飛車角と吉良常』（1968）を始めとした数々の名作を発表。遺作は『真剣勝負』（1971）。ロケ中に倒れ、再起し撮影を続行したと言われています。公開は死後に。骨太の堂々たる作品作りは決して古びることなく今でも確固たる存在感を示す映画人です。